

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1390

自分をほめたたえ、他人を軽蔑し、みずからの慢心のために卑しくなつたひと、かれを賤しい人であると知れ。
(釈迦)

△解説▽自分をほめない、他人をそしらないという戒めは、後の漢訳された仏典では「不自讃毀他戒」と呼ばれている。そこには、他人と比べて自分がすぐれているという思い、すぐれていると思いたい気持ち（慢心）が根底に横たわっている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.2 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1389

人間における「わがもの」という観念をすてて心を統一し、あわれみ（同情）に専念する。
(釈迦)

△解説▽慈しみの心をもつには、人々とのあいだに障壁を作らないことが大事になる。障壁を作ってしまうのは「わがもの」という観念である。壁は他を除外し、ときには対立を生む。「自分のもの」という境界を広げて、凝り固まった自我の執着を離れる実践が大切。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.1 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1392

まことに一事をこととせざれば、一智に達することなし。
(道元)

△解説▽真実の知恵に達するためには、一つのこと専心して努力を続ける必要がある。真実にいたる道はいくつかあるであろうが、あれもこれもその方法を兼ねてやっていると、迷いも生じるであろうし、確実なる目的に達することはできない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.4 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1391

瞋恚より地獄に入事、其理明也。瞋恚より起こる所の念、一として正路なる事なし。
(鈴木正三)

△解説▽怒りの心を持つ人が地獄に入ること、その道理はあきらかである。怒りをもった時には心は地獄にいる。怒りから生じた心で正しい道にかなうことは一つもない。他人の心と同時に自分の心も焼きつくす。怒りは燃えさかる炎よりもはなはだしい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.3 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1394

与える前にはこころ楽しく、与えつつあるときには心を清らかならしめ、与えおわつては、こころ喜ばし。
(釈迦)

△解説▽与える行為、つまり布施は重要な徳目である。誰にでもできる実践かもしれないが、正しく与えるとなると、なかなかむずかしい。与える前、与えるとき、与え終わっても、そこに相手に対する期待や、後悔がない布施のかたちが理想的である。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.6 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1393

それ説法は、直にすべからく応時応節なるべし。もし応時せずばすべてこれ、非時閑語なり。
(道元)

△解説▽師は自らが体得した道を、弟子にも同様に体得することを求める。知識としての理解を求めるわけではない。そのためには、相手の機根（素質や状況）を知って、時に応じて、もつともよい方法をとらなければ、説法はすべて無駄な話閑語になってしまう。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.5 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1396

不善を知り、また不善の根源を知り、善を知り、善の根源をしく見る者である。
(仏弟子サーリプッタ)

△解説▽正しく見るとは何かを説く経典（『正見経』）の一説。不善とは生き物を殺す、うそをつくなどの行為で、それを離れるのが善という。また、不善の根源とは、むさぼり、いかり、おろかさで、それらが無いのが善の根源であると説明する。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.8 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1395

学んで思わざれば則ち罔し。思いて学ばざれば則ち殆うし。
(『論語』)

△解説▽「罔し」とは「道理にくだらない、おろか」の意味。教えを学んで知識を得ることばかりで、主体的に考えてみなければ、ものごとはよくわからないし、不十分である。蓄積された成果は学び、それに裏打ちされた自らの実践が求められる。しかし、学ぶことも重要。それなくしては危険である。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.7 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1398

和合しているときは、鳥たちは網を持って去る。かれらは争うようになるだろう。そのときは、おれのものになる。
（『ジャータカ』）

△解説▽ウズラ獲りが投げた網を、和合している鳥たちは網の目にかけて助かった。しかし、口論が生じ和合が乱れ、網を持ち上げなかつたので捕まってしまう。「親族間の言い争い、仲たがいは破滅のもと」と教える。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.10 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1397

衆の因縁生の法は、我則ち是れ空なりと説く。何を以ての故に、衆縁具足^{しゅうえんぐそく}和合して物生ず。是の物は衆因縁に属するが故に自性無く、自性無きが故に空なり。
（『中論』）

△解説▽すべては因縁（縁起）によって生じている。だから、空（そこに固定的な実体は認められない）という。変化しない実体がないがために空なのである。その真実のあり方を知ることが大切だという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.9 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1400

なにゆえにわたくしはこのことをいずれとも説かなかつたのか。なぜなら利益を伴わないし、正しいさとり、安らぎのためにならないからである。
（『釈迦』）

△解説▽ブツタは多くの思想家が議論していた「我（靈魂）や世界は常住かそうでないか」といった議論には参加しなかつた。それらは苦しみ^{くしみ}の克服には役に立たないから。また、議論する時間は実践に関して無駄だから。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.12 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1399

利益をはかろうとし、同情してくる人に忠告されながら、教えに従わないものは、このように殺害されて横たわる。
（『ジャータカ』）

△解説▽毒蛇を息子のように愛情を注ぎ育てていた男。危険だからやめるように言った師匠の忠告を聞かなかつたため、あるとき手をかまれて男は死んでしまう。この話にちなんで、聞き分けがなく賢者の教えに従わない愚かさを教えている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1402

真理を知る者、見る者にとつて、もろもろの煩惱の汚れの消滅が起こる、とわれは説く。知らざる者、見ざる者にとつては、それが起こらないのである。

（釈迦）

△解説▽この場合「真理を知る」とは、四つの真理であるという。つまり、苦しみについて（現状把握）、苦しみの生起（原因）、苦しみの消滅、苦しみの消滅にいたる道（具体的な実践方法）であると説いている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1401

わたくしは世間と争わない。しかし世間がわたしと争う。法を語る人は、世間の何人とも争わない。

（釈迦）

△解説▽世間ではさまざまな問題について議論され論争が起こっていた。しかし、ブツダにとつて進む道は決まっていた。苦しみの克服と、その道を伝えること。であるから、それ以外の不必要な議論に巻き込まれるのは苦痛で不必要なのである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.13 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1404

たとえ異教徒でも、一つの文章でも知ってくればよい。そうしたら長いあいだ彼らのためになり、彼らを安楽ならしめるだろう。

（釈迦）

△解説▽真理は隠されることなく公開されるもの。ブツダはいかなる人々にも教えを説く。真理は相手を選ばない。どのような人に対しても完全な教えを説くのである。もちろん説き方の工夫はされるのであるが、真実性は変わらない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.17 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1403

真理を見る立場に立つと、既成諸宗教のどれにもこだわらなくなる。どの宗教に属していてもよい。しよせんは真理をみればよいのである。

（中村元）

△解説▽真理、理想の立場を徹底していくと、宗教の差を越えてしまふ。ブツダは、真の修行者である道を明らかにして、実践し、説いた。それ以外に別物（例えば、「仏教」という宗教）を作ろうと目指していたのではなかったらう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.16 中村元記念館協力